

もうひとつ明日

村上 馨

おとうさんが死んだ。
つい先刻、母からいつものようの一ごはん
ですよ」と言われたのだが、まるでその日常
茶飯事になつた耳慣れ言葉を聞くほどに、
ふわあつと聞いた。それほど、父は私の中で
遠い人になつていたし、むろん形の上では言
わざもがなだつた。とうに父ではなくなつた
一人の男の死が告げられたに過ぎないのだ。
母はおろおろして聞いた。
「どうしよう……どうしたらいい?」と、
私の目の中を覗き込むのだった。それが、今
の父の死に至つてなお置かれていている根のない
曖昧な状況を象徴していた。
「行こうよ。とさんがやつと帰つてきたのよ、
長い旅から……」
母はほんとは今すぐにでも行きたいのだと
思う。それぐらいわかつてあげなくてはと思
う。二十八年も面倒をかけているのだから、
う。

ばちが当たつてしまふ。私が、嫌がる母を無理矢理引っ張つて行つたのだ。それでいい。
「でもねえ···おまえ、相手もいることだ
し、この前見舞いに行つたときのことだつて
おまえ覚えているだろう？」
「まあね、何よあれ···でも、籍は入れて
ないはずよ。それに、あの人の死に水をとれ
るのは、かあさんだけよ」
とは言うものの、俗な心配もあつた。いつ
たいどこで誰が葬式を出すのか、それすら定
間は休暇を願い出なければならなかつたが、
かではなかつたし、私にしても、病院に三日
問題はどんな理由をつけるかだつた。父の籍
は疾うになかつたし、同僚の看護婦には父と
は中学のとき死別したとすでに言つてあつた。
かと言つて、急にいいかげんな理由で三日間
も休んだとあつては、彼女たちのサイクルが
とく狂うのだ。病棟がパニッスクになる。
がまた頭を痛めることになるだろう。
う。日勤、準夜勤、夜勤のサイクルがことご
う。日勤、準夜勤、夜勤がことごとくに遭
う。病棟がパニッスクになる。婦長

そんなことを考えながら、私は婦長に連絡を入れるための受話器のダイヤルをもう回していった。母はと言えば、気丈にも、涙も見せず、せつせと身支度をはじめていた。

それは、つい一ヶ月ほど前、父が吐血して入院したと聞いて、母と二人あわてふためき駆けつけたときのことだ。一時は意識もなくしたほどと聞いたが、ベッドの脇には見知らぬ女が陣取つていて、父の口に箸を運ぶ最中だつた。その図は、まるで溺愛する病床の息子をいたわる母に似た光景そのものだつた。着るものも着ず駆けつけたといふのに、この鞘当てだ。いつまでたつてもこの人の病気は治らない。墓場まで持つていいくしかしようのないものだ。私たちの居場所はなかつた。それでも母は、気丈にも堂々とした振る舞いで私を驚かせた。どこに潜んでいたのだ、こんな母が。

「最初の妻の野本です。お世話をかけます」

母はその人に深々と頭を下げて見せた。

「最初の」と言う言葉に力が籠められたよう
に私は聞いたし、それ以上に離婚しても「野
本」という姓を捨てていかない女であることを、
社交辞令の中にも匂わせたかったのではない
か。そうは言つても、正式に妻の称号を得て
いる人は母しかいないことも事実のはずだけ
れども・・・。
当の父はと言えば、虚ろな目をして窓の外
を見ていた。いつたいいつの間に、またぞろ
こんな女が登場していったのだ。母を捨て、家
族を捨て別の女と一緒になつて、それで幸せ
になつて、いるかと思つてあきらめもつきかけ
た頃にはもうその女と別れて一人寂しく暮ら
していると風の便りに聞いた。なのにこのざ
まだ。あのとき、母はぐらりときていたのだ。
ほのかにやり直す夢すら懷いていた。なの
に・・・だ。
父の、新しい？その女は、父の口に付けられ
た箸を止め、じろりと鋭い眼差しを返すと

目線を上から下へ、まるで私たち親子を值踏みでもするかのようになつくりと下げた。それから作り笑いとも照れともつかぬ笑みを浮かべた。

「ああ、それはどうも……わざわざ松江からお見舞いに？・・・」

「どんな具合ですか？」

母は不安そうに訊ねる。

「熱が上がったり下がったりを繰り返してますねえ。すぐれないみたいですね」

母は口を利いたものかどうか迷つているふうだ。こんなときぐらいせめて一步譲つて席ぐらい外せと言いたい。でも口に出しては言えない。言いたいことの十分の一ほども言えないと、

「私が中学のとき、父とは死別しました」と、

ない心根に私たち親子はなつてしまつていてきたのだ。言いたいことを言えばボロも出こんな嘘の上に私は人との交際を成り立たせれたつておかしくない。

。彼とだつてそうだ。いつ砂上の楼閣は崩

母は父と話すのだろうか？十五年ぶりの再会のはずだ。

「あ・な・た・」と女が父を促した。なんと

いう肉感的な響き・・・生温かい夜の裸の匂いがする。私たち親子が二人してかかっても

この女には勝てないはずだ。

昔から父はそうだった。母性をくすぐると

言うか、甘え上手と言うか・・・事実、母だ

つて父より四つも年上なのだ。そして、その

後父が繰り返した色恋遍歴の相手もみんな年

上の女ばかりだった。不思議だと思えること

は、父が取り替えてきた女がみんながみんな

どことなく母の面影に似ていると見えてくる

ことだ。この、たぶん、父にとつて最後にな

るだろは、母は頑とし

て否定するのだが

「すまないが、みんな席を外してくれば

か」

父が顔を背けたままそう言った。みんなと

いうことは、女と私を意味する。せめて女と

私を同義に扱つてほしくはなかつたが、父が母を一義に扱つてくれたことの方が重い。席を外す前に、訳もわからず、とつさに私はなぜか父の手を取つていた。

「ごめんなさい。これでも一応看護婦ですか

ら・・・」

そんな言い訳をして、私は半ば強引に父の脈を取つた。か細い血管が力無く脈を拍つている。「ひどい不整脈・・・」私は心の中で反芻する。今まで何人とも知れぬ人の肉体を見てきたのだ。蠟燭の炎がどれくらい燃え尽きているかぐらいいの察しはつく。

「胸も見せてください・・・」

私は、さも事務的な調子でそこまで言つて

言葉を止めてしまつた。あとににつづけるつ

もりだつた「とうさん」という言葉は裡でさやいた。懐かしい響き。言い知れぬ熱い情がこみ上げてくる。が、手はそれとは裏腹にい

つ そ う 事 務 的 に 父 の 躯 を 扱 い だ し て い た 。 胸
元 を は だ け る と 、 瘦 せ 細 つ た 躯 に 肋 骨 が 浮 い
て 見 え た 。 枕 元 の 膫 盆 に は 吐 物 の 痕 が あ る 。
た ぶ ん 、 抗 ガ ン 剤 の 副 作 用 で 頻 繁 に 吐 き 気 に
襲 わ れ て い る の だ ろ う 。 あ れ だ け 外 見 に 気 を
遣 い 、 髮 の 手 入 れ に は 金 と 時 間 を か け て い た
父 の 頭 は 抜 け 毛 が 進 み 、 か つ て の 面 影 は な か
つ た 。 い つ 逝 つ て も お か し く な か つ た 。 も う
充 分 だ つ た 。
「 だ い じ ょ う ぶ よ 、 と う さ ん 。 じ き に 元 気 に
な れ る わ よ 」
そ ん な 気 休 め め い た こ と し か 言 え な か つ た 。
そ れ が 、 父 の ん く も り を この 手 に 感 じ る こ
と の で き た 最 後 だ つ た 。
私 は 父 か ら 離 れ た 。
「 だ れ か つ き あ つ て る 人 で も い る の か ？」
席 を 外 そ う と す る 私 を 父 が 呼 び 止 め た 。
「 う う ん 、 そ ん な ふ う に 見 え た 。 ち ゃ ん と 話 し
て お け 」

「えつ、なにを」

「おれのことだ。こんなおやじがいたという
ことを、ちゃんと話しておけ」
返事はせずに、女と二人部屋を出た。なに
が話しておけだ。「私だけはちがう」そう自
分に言い聞かせつづけて今日まで生きてきた
のだ。あの日から、私の中で父は死んだのだ。
そして、おばあちゃんはほんとうに死んでし
まつたのだ。わたしのせいです……。

あの頃から、父の素行はおかしかったのだ
ろう。おばあちゃんは、たぶんそのことを気
に病んでいた。その頃、父は広島で単身仕事
をしていて、月に一度くらいの割で松江に帰
つてきていた。小学六年生の夏休みにおばあ
ちゃんは、私に父について行つて夏休みの間
は広島で暮らせと言つた。私は絶対いやだ
と言つた。友だちとの約束はいつぱいあつた
ほどあつた。「だからいいや」だと正直に言つ
し、小学校最後の夏休みだ。し、

ただけなのに・・・その明くる日におばあちゃんは突然納屋で首をくくったのだった。私は泣きじやくつた。私がいやだと言つたから、おばあちゃんは死んでしまったのだ。私の心にもう二度と抜けないほどの深いくさびが打ち込まれたのはそのときだ。一週間ほど学校を休んで再び登校したときのことだ。いきなり先生は、私を教壇の前に立たせて、家族の死というものに直面してどんな気持ちであつたのか、そのときの模様をみんなに話せと言ふのだ。なんといふ仕打ち。死ぬほどつらい長い時間・・・なにを言つたのかさえ覚えていない。先生を嫌いになつたのはそれからだ。この事件が父や母にどんな影響を与えたのか私はわからぬ。父がまた広島に仕事に行くと言つたきり二度と家には帰つてこなかつたことだけが事実と見て確かなことだ。その日のことはなぜかよく覚えている。

その日、学校から帰ると、私は中学生になつていた)、家の三和土には子犬が繋がれていた。私がとても可愛がつていたメリーガ死んでしまつてから、さびしそうにしていると、うので父がどこから連れていってくれたのだと母は言つた。子犬は土間に小さくうずくまりふるえていた。私は抱きかかえ、牛乳を飲ませた。父を少しばかり見直した。少しは私のことも考えてはくれていたのだ。それから、友達の家に行くという約束を思い出した。小遣いが要る。散髪に行つているという父を追いかけた。父はまだ首からすっぽりケープを巻かれて台に座つていた。父の動かせない父に向かつて言った。大事にする」「子犬ありがとう。大事にする」が少し弛んだように見えた。首の動かせない父に向かつて言った。目元「そうか、それはよかつた」「ともだちのところへ行くの。お小遣いちょうだい」私が差し出した手に、父はケープの下からし

わくちやになつた千円札を一枚取り出すと、それを私の手に強く握らせた。いつももらう小遣いにしては多すぎる額だつた。父をもつと見直した。

「これがすんだら広島へ行く。かあさんのこと、たのんだぞ」私はだまつて肯いた。このときも、やはり置かれた状況に正直に反応しただけだ。何も知らずに・・・。

このことを母に話すと母はショックを受けていた。私の顔をものすごい目で睨みつけた。まるで私が父その人でもあるかのようだつた。それっきり父は帰らなかつた。父その人ででもあるかのようだつた。

事も辞めていいたし、むろんアパートも引き払つていてもぬけの殻だつた。どこへ行つたか

は隠された何かがきつとある。注意深い女になつた。かれらのことがあつてから、人の言う言葉の背後に

病院の待合室で、席を外したその女と二人
いやな時間を過ごす羽目になつたとき、その
女もまたいきなりそんな口上から切り込んで
きた。どこまで、この女は父の面倒を見るつ
もりでいるのだろう？それがそのとき私の知
りたいすべてだった。すでに、父は生ける屍
に近い躰になりつつある。そのことをこの女
は知つていいのだろうか？

「どこが似てますか？」

私は逃げない決心をした。せめて、母を守
らなければならぬ。もちろん、顔形もあるでし
ょうけど、それ以上に隠せないものがあるわ。
あなたはおいくつ？

「二十八ですか？」

「そうおひとり？」

「二十八ですけど」

「そんなことまでこの人に答えなけ
ればならないのか。

そうだった。とどのつまり、みんな一人だ
つたということの再確認に過ぎなかつた。母
もそして私も・・・。
「おとうさん、あなたのことをとても気にし
てらっしゃいますよ。ご自分のことで、結婚
を怖れてるんじゃないのかつて・・・お姉さん
も妹さんも立派な家庭をお持ちだつて聞きま
した」
待ち続けた。私は、もう、気の遠くなるほど
、長く・・・父の帰つてくる日を。おばあ
ちゃんは私のせいでの死んだ。その三日ほど前
に、おばあちゃんは私のために真新しい、私の
の好きな水玉模様のワンピースを買ってくれ
ていた。私は、小躍りして喜んで見せた。それ
は、私を父のもとへ送り出すためのおばあ
ちゃんのはなむけであつたのかもしれない。
今でも、私は、それを、一度も袖を通さない。
まま、おばあちゃんの形見に持つていて、
れを着ることのできた日はどうとう永遠に来
なかつた。

「ごめんごめん」と言いながら妹が小走りに駆けてきて話はそこで腰を折られた。私は妹に耳打ちすると、主治医に面会を求めた。告知のことも、末期医療のこともある。そのことを、父には無論、母にもその女にも知られたくなかつた。父も母ももう充分苦しんできたのむしかない。

たはずだつた。あとのことば浜田に住む妹に懐かしい潮の香り・・私は生家に近い小高い丘に立つていた。幼い頃いつもそうしたように、そこからは私の好きだった港町が見下ろせた。生家の前を歩いて通り過ぎて、ここまでやつてきた。かつて私がいたはずの台所から夕餉の煙がほのかに漂い、赤ん坊の泣き叫ぶ声が聞こえてきた。かりが点いた。それは、私たちがいたはづの台い、今では手の届きようもない希望の灯とも見えた。生家はすでに人手に渡り、玄関には

見慣れぬ「崎田」と書かれた門札が掲げられていた。夕刻になると、たくさん漁船がいつせいに漁り火を灯しはじめ、ともづなを解いてひとつまたひとつ、誰が号令をかけるわけでもないけれど、まるで隊列を組むようによつくりと岸壁を離れて行く。それを眺めていたのが好きだった。海が燃えはじめる時刻・私の一番好きな色だ。これだけが今も昔も変わらない。海の緑と黄金色の落日、波に弾ける光のかけら。そして暮れなずむ空に濃紺色に包み込まれる町並み。そこの全部が今ゆつくりと時間をかけて渾然一体となり、妖しげな光となつて地上に浮かび上がる。中で執り行われたような葬儀もなく、まるで夢のとつの中つづいてくれないか?」「ぼくについてきてくれないか?」「今、私にも答えを出さなければならぬひとつの問い合わせあつた。

父の死んだ知らせが妹から届いたその前日、
準夜勤務の申し送りを終えたもう零時に近い
頃、当直の速見医師は、私をカンファレンス
ルームで呼び止めて、そう唐突に言つたのだ
つた。あと一ヶ月もしたら、先生は京都の大
学病院に帰るのだ。もしかしたら、私は心の
中でこの言葉をずっと待つていたのかもしれない。
私の躰はピクリと反応した。だが、同時に
もいた。彼が非番で、私が準夜明けになる
時もいた。私が准夜明けになると、彼が決まって
帰りに彼のアパートへもぐり込み、何度も抱かれて夜を過ごしたことがあつたのに、
あつたのに、それがまるでなかつたみたいに、
一人の男と面と向かっていふうだつた。
「今、どうしてもお答えしなければいけませ
んか？」
自分でも驚く言葉が口を突いて出ていた。
彼のほうが驚いたようだつた。
「今、どうしてもお答えしなければいけませ
んか？」
自分でも驚く言葉が口を突いて出ていた。
彼のほうが驚いたようだつた。
自分の語調にあつた。

「どうしたの？ やけに挑戦的になっちゃつて……」

ベッドの中で、何度も父のことを話そうと思つたことか・・・いざとなると、いつもその度に、私を遮つてきたこの闇はなんだろう。

彼に、引っかかつていてることはあつた。それも問い合わせなかつた。だがこれは、勇気がないだけのことだつた。こちらは目を瞑ろうと思えばできることだつたのかもしれない。

その三日ほど前、深夜勤務が明けて口ツカールームで同僚の由美子と二人、遅くなつてしまつた着替えを急いでいたときのことだつし送りに、これからデートなのだと言つていした。後輩の友恵のいつも要領を得ない長い申し送りに、これからデートなのだと言つていした由美子はいつになくいらいらを募らせていました。荒っぽくストッキングをずりおろしながら、こともなげに言つて見せたのだった。

「速見先生ったらね、最近変な体位を要求するのよね。欲求不満なのかしら？」

静まり返った夜の外れでサイレンだけが鳴り響いていた。港のそこかしに青白い明かりが瞬きはじめていた。死んでしまったはずの父に、私はなんであんなことをしたのだろう。固く横たえられた父に死化粧を施すためには、服を脱がせ躰を拭きはじめようとしたとき、私は、無我夢中で父の背中を両手で叩きはじめたのだった。通夜にきていた父の幼なじみの同級生は呆気にとられて私を見ていた。その視線を感じてやつと我に返つた。それから、父の髪を剃り、薄く紅を引き、ファンデーションを塗つた。そのときだつた、母がぐらりとスローモーションのようには寄りかかり、次の瞬間どつと泣き崩れたのは、もうひとつ明日といふ。私が父について行つたとあつたのだろうか？私が父について行つたと

して、それにづく明日はどんなであつたるう。その問い合わせ何の意味も持たないこともよくわかつて。私はここにいる。ここで待つづけるしかないのだ。もうひとつ明日があるとすれば・・・。」
「粋な人だつたねえ・・・。」
さつきから黙つてばかりいた母がぽつりと言つて、丘の突端の崖に向けて歩き出した。
遣骨を両手に抱きかかえた母が、最後の残光を体中に浴びてシリエットになつた。私は駆け出らししばらくして日はすつぽりと落ち、とばりが降りた。母も見えなくなつた。私は駆け出していた。
「おかあさん！」
泣き叫びながら、母の後ろ姿にすがつた。母はぴくりとも動かなかつた。すでに母の手に父の帰つて往つた。
海の、寄せては返す波音ばかりが鳴り響いていた。
いた。
た海の、目の前の暗い淵からは、父の帰つて往つた。
に父の遺骨はなく海中深く没して、すでに母の手に父の帰つて往つた。
母はぴくりとも動かなかつた。すでに母の手に父の帰つて往つた。
て、目の前の暗い淵からは、父の帰つて往つた。
海の、目の前の暗い淵からは、父の帰つて往つた。